

ギターと私(3)－高校時代②

前回に最後に、「その後の人生までを変えてしまうような経験をするようになる。」と、ややオーヴァーなことを書いたが、それは、あながち過言でもないのである。ただし、演奏に感動したとかといった類ではなく、そのコンサートに載っていた「ギター教室案内」を見て、故武山明先生に師事したことを指している。いつから師事したのか記憶に定かではないが、師事してまもなくの頃、レッスンを待つ我々(近藤さんと一緒だった)の前に現れた先生が、「今外から帰ったばかりで汗を流したいから、すぐにはレッスンできない。」と言われたことや、高2の夏休みに「合歓の郷」へ、先生や諸先輩たちと一緒して合宿に行ったことを覚えているから、高校2年生になった頃のことであつたらうか？ そうだとすれば、昭和45年の春のことであつた。

武山先生に師事し、ギターを習うようになり、自動的に先生が中心だった「ギタリストスギふ」にも入会することになって、私の生活は一変した。それは、「ギタリストスギふ」のメンバーは当たり前ながら大人の人たちばかりであり、そんな大人の人たちとのお付き合いが始まったからである。あまり大きな声では言えないが、大人のメンバーたちに交って忘年会に出席した私たち3人は、あろうことかお酒を飲み、私を除く二人はダウンしてしまつたことがあつた。念のために申せば、私は少ししか飲まなかつたからダウンしなかつただけであり、酒が強いわけではない。それで、翌日高校に行ってみたら、前の晩にダウンした二人が欠席しており、偶然にも同じクラスだった私は、担任の先生から事情を知らないかと聞かれ、答えに窮した記憶がある。まさか、「昨晚飲みすぎて、二日酔いで寝ています。」とも言えないだろう。

今から思えば、昨日まで子どもだった者が、突然大人の中に放り込まれたわけであり、一つ一つが強烈な経験であつたわけである。そんな生活の中で、ギターを弾く技量は多少上がったが、高校の成績は惨憺たるものであつた。やがて高3になり、人並みに受験勉強を始めた私は、とりあえず武山ギター教室を休会した。どうしても親元を離れて進学したかつたからである。これも今から思えばだが、大人の人たちとのお付き合いが中断してよかつたのだと思う。あのままの生活を続けていたら、どうなつていたか想像もつかない。ちなみに、私以外の二人もそれぞれ進学して、まっとうな？ 人生を送つた。

高校時代に弾いていた曲で記憶に残っているのは、初めて「ギタリストスギふ」の演奏会に出演したときに弾いた、F.ソルの「メヌエット・イ長調」やG.フレスコバルディの「アリアと変奏」ぐらいしか覚えていない。そういえば、「ギタリストスギふ」の先輩から河野ギター(1963年製5号)を譲っていただいたのも、高校時代のことであつた。後から聞いた話によると、このギターは、最初、故後藤則之先生が所有していたギターで、当時はこれが最高級であつたとのことである。この河野ギターは、それから現在までずっと私の手元にある。もっとも、ここしばらくはケースに入れっぱなしで弾いてはいない。

今から約半世紀前のことを思い出すままに綴っていると、兼好の「あやしうこそものぐるほしけれ」ではないが、妙におかしな気分になってくる。先に挙げた、F.ソルの「メヌエット・イ長調」の楽譜は、先生から貸していただいた楽譜を写譜したものが、現在も手元にある。それには、武山先生の手による「書き込み」も見える。他人から見れば、一枚の見開きの手写譜に過ぎないが、私には、今となつては放しがたいものである。棺桶に入れてもらうように、家内に今から頼んでおくことにしようか？

(2019.11.14 記)